

1707 年宝永地震による浜名湖北部の 沈降と大坂の被害数

矢田俊文^{1) 2)}

1. はじめに

本稿は宝永四年十月四日（1707 年 10 月 28 日）に起った宝永地震による被害を、歴史学の方法により検討するものである。検討対象地域は、浜名湖北部（静岡県浜松市北区）と大坂三郷（大阪市中心部）で、浜名湖北部では土地の沈降、大坂三郷では建物被害・死亡者数を明らかにする。

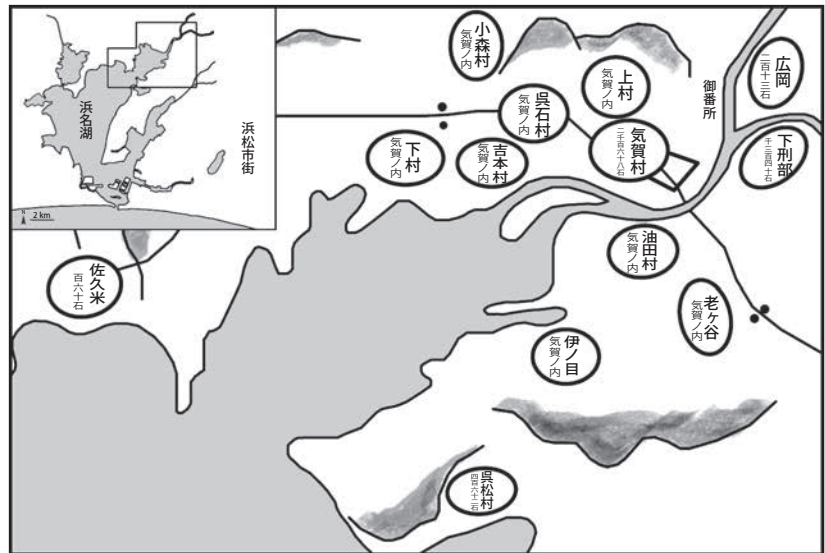
歴史学研究者が事実を明らかにするための史料に順位をつけるとすれば、①文書、②日記等、③編纂物・文芸史料となる（矢田、2005、2010）。文書は文書が記された日付とほぼ同じ頃に書かれたものであり、同時代の史料として重要な史料である。日記も日付とほぼ同じ頃に書かれたものであり、歴史学にとって文書・日記は重要である。③編纂物・文芸史料のうちには年代記が含まれる。年代記は地震研究にとって極めて重要な史料ではあるが、ひとつひとつの年代記の史料的性格を検討することなしに使用することは危険な史料である（矢田、2005、2010、2012）。

本稿では、歴史学で扱う史料のうち、確実な史料である文書を使って宝永地震による被害の実態を明らかにする。

2. 浜名湖北部の沈降

2. では、宝永四年（1707 年）十月四日に起った宝永地震により浜名湖北部の^{きがいめ}気賀伊目村（第 1 図）が沈降したこと、さらに、その沈降地域のその後の状況を明らかにする。宝永地震により遠江天竜川以東地域の土地が隆起し地形が変化したことは、地質学的な研究により実証されている（藤原ほか、2009）。地震による土地の隆起・沈降等の変化は、文書によっても明らかにできる。

地震により、浜名湖北部地域が沈降したことを記した文書（史料 1、国文学研究資料館所蔵気賀宿文書）がある。



第 1 図は GSJ 地質ニュースへの掲載に限って使用許諾を受けており、CC-BY の対象外です。CC-BY is not applied to the image of fig. 1.

第 1 図 遠江国正保国絵図（気賀村中心、蓬左文庫所蔵）。

史料 1 は、表紙に「宝永四年亥十月四日大地震二付気賀村田地亡所諸書留之控」とある冊子に書写された文書である。史料 1 の「乍恐口上書を以奉願上候事」の日付は、地震が起った翌年の宝永五年三月である。文書は 3 カ条からなり、第 1 条目には次のように記されている。以下、本稿と関係する箇所を掲げる。

（史料 1）

一、気賀村之儀、本高二千六百石余御座候所、去年十月四日之大地震、津浪二而、田畑千七百石余荒地罷成、尔今汐引不申候、少々引候節も田地より下ケ、式尺水下二成候故、只今之通二而ハ、永々荒地罷成、百姓住居難仕、飢死より外ハ無御座候、

史料 1 には、「気賀村は本高 2,600 石余のところであるが、去年宝永四年十月四日大地震の津波で、田畑 1,700 石余が荒地になり今も潮が引かない。すこし潮が引いても田地がより下げられ、2 尺浜名湖の水の下になってしまった。このままでは荒地地となり今まで通りに百姓は生活しがたく、飢え死にするしかない」と記されている。

次に、宝永地震の 50 年後の宝暦六年（1756 年）十月

1) 新潟大学 人文学部
2) 新潟大学 災害・復興科学研究所

キーワード：1707 年、宝永地震、古文書、浜名湖北部、大坂

に作成された気賀伊目村の村明細帳の写（史料2，気賀伊目村白柳家文書，静岡県立中央図書館歴史文化情報センター蔵写真帳）を検討する。

史料2により気賀伊目村の村高の内のそれぞれの引高の割合を検討すると，村高の約80パーセントが田方海成荒地となっていることがわかる（第1表）。

第1表の田方海成荒地とはどういうものなのであろうか。

第1表 宝暦六年（1756年）遠江国引佐郡気賀伊目村差出明細帳。

項目	石高(石)	石高割合(%)	引高項目
石高	94.25500	100.00000	
引高	78.50369		
	0.29633	0.31439	前々田方堤敷永引
	0.49400	0.52411	前々田方川欠永引
	1.21866	1.29294	前々田方堀代永引
	0.27300	0.28964	前々畑方堤敷永引
	0.56500	0.59944	前々畑方川欠永引
	0.49600	0.52623	前々畑方堀代同断
	75.16070	79.74187	田方海成荒地
残高	15.75131	16.71138	

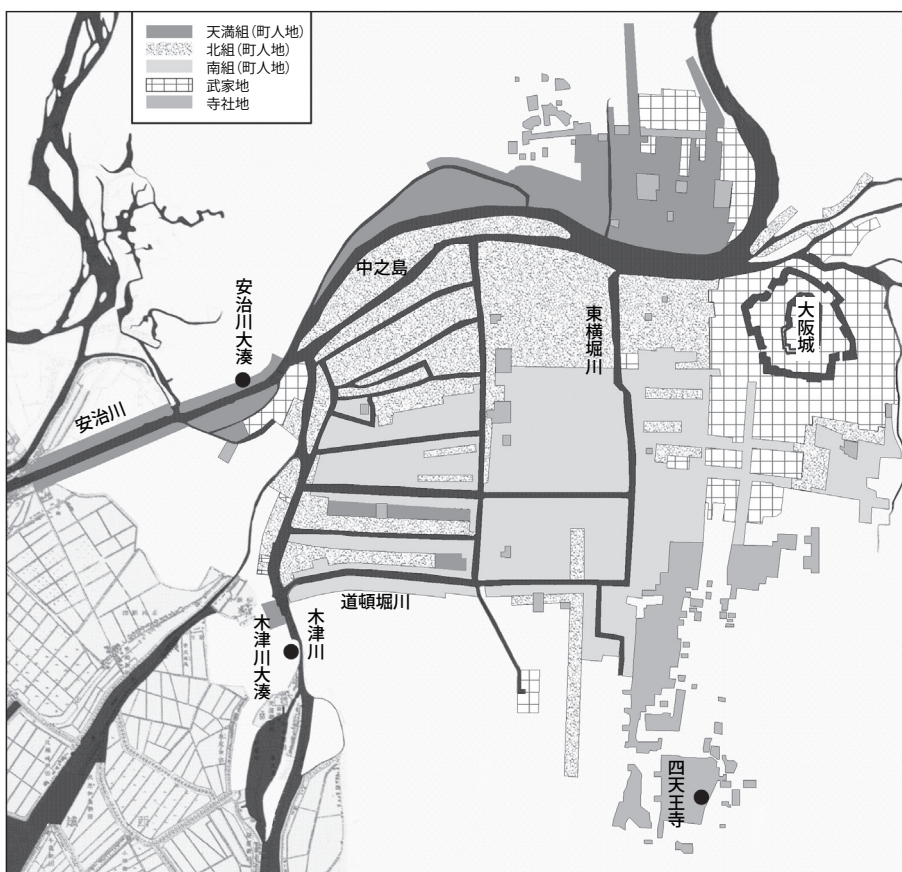
典拠) 気賀伊目村白柳家文書

史料2の田方海成荒地について記された箇所には，宝永四年十月の地震で浜名湖の水下になり，その後も高潮の時には水下となってしまう，耕作ができない田地であると記されている。

すでに史料1によって，気賀村が1707年宝永地震によって土地が沈降し，田地が浜名湖の水面下になってしまったことを確認している。宝永地震から50年後に作成された気賀伊目村明細帳（史料2）により，沈降した土地はいまでもとに戻らず，村高の約80パーセントの田地が高潮の際には浜名湖の水面下になってしまうことがわかる。史料1と史料2によって，浜名湖北部の気賀村地域が1707年宝永地震によって土地が沈降したことが確認できる（矢田，2013a）。

3. 大坂三郷の被害数

3. では，宝永地震による大坂三郷の被害数を明らかにする。宝永地震による津波は大阪湾に押し寄せ，低地に広がる大坂三郷（第2図）は大きな被害を被った。大坂三郷の人口は，元禄十二年（1699年）時点で36万4154人と推定されている（大阪市参事会，1913）。



第2図 大坂三郷（天保年間，大阪歴史博物館，2013を改変）。

宝永地震による大坂三郷の被害数を確実な史料を用いて論じている論文はほとんどない。確実な史料のみで宝永地震による大坂の被害を推定した研究には、西山昭仁ほかによる研究がある(西山ほか, 2009)。しかし西山ほか(2009)を含め、これまでの大坂三郷の被害数について言及した論文は、幕府への被害報告書等を検討して被害数を求めたものではない。そこで3では、さまざまな幕府への被害報告の文書を検討することによって、宝永地震による大坂三郷の被害数を確定する。

信頼できる史料である尾張藩士朝日重章の日記「鸚鵡籠中記」^{おうむろうちゅうき}所収の文書と幕府への被害報告書を記した「楽只堂年録」^{らくしどうねんろく}によれば、地震の翌日の十月五日に把握された大坂町中の被害数は、建物被害(崩家・納屋・土蔵)約900軒、死人約260人、橋の被害(破損・落橋)約35,6カ所であった。

「鸚鵡籠中記」には、十月五日よりも後の十月十日迄の被害報告書(史料3)が記されている。

(史料3)

- ・町方竈数一万六千余潰○落橋二十六ヶ所
 - 廻船川内にて破損 三百二十二艘 但八百石以下の小船不知数
 - ・地震にて圧死 三千六百三十人
 - ・高浪にて溺死 一万二千百人余
- 是は地震後、浜近所の輩又地震あらん事を恐れ、皆々船に乗り、及金銀財宝を積入罷在候処に、申半刻高浪来りて、川口にかけ置たる大船、高浪に乗して矢の如くに来る、此船の下へ人の乗たる小船皆入て押し溺死する也、或は地震の節、橋等渡りかゝりて死するもあり、
- 右は今月十日迄之書上也、此外船に大分死人有之、一々不違数之、十日の評定には二万人の余と云々、

史料3によると大坂の被害は、竈数(世帯数)^{かまどかず}16,000軒余、圧死者3,630人、溺死者12,100人余、落橋26カ所であった。

被害数は十月五日に把握された大坂町中の被害数では、建物被害(崩家・納屋・土蔵)約900軒、死者約260人、橋の被害(破損・落橋)約35,6カ所であったものが、史料3(十月十日迄)では竈数16,000軒余、圧死者3,630人、溺死者12,100人余、落橋26カ所となっている。数字が大幅に増えている。落橋の箇所は減っているものの、死者数は死者約260人から圧死者3,630人、溺死者12,100人余と、実に約60倍も増えている。

史料3には、竈数(世帯数)も記載され、死者は圧死者と溺死者に区別されて書き上げられ、記載が詳細になっている。これは5日間の被害調査の結果、詳細な情報が把握されたものと考えられる。

尾張藩士が記録した宝永地震の大坂の被害記録には、堀貞儀^{さだのり}が記した『朝林』^{ちやうりん}(史料4、名古屋市蓬左文庫所蔵)がある。史料4には、「右十月十日迄、公儀御帳面之写のよし」とあることから、幕府の被害報告書を写したものであると思われる。さらに被害報告は十月十日迄のものであることがわかる。史料4から大坂三郷の被害数は、竈数3,537、軒数(町役・役家)653軒、圧死者5,351人、溺死者16,371人であったことがわかる。

史料3と4の被害数を比べると、圧死者・溺死者については極端な違いがなくいずれも史料4の方が多い。史料3と4の圧死者・溺死者の数の違いは把握した日の違いであると思われる。史料3よりも史料4の方が後日に把握した被害数であると考えられる。以上のことから、宝永四年十月四日(1707年10月28日)に起った宝永地震による大坂三郷の被害は、竈数3,537、軒数653軒、圧死者5,351人、溺死者16,371人以上であったとすることができる。

「楽只堂年録」からは、各藩が地震直後に幕府へ提出した被害報告書を後日新しい情報に修正して報告していることが読み取れる。たとえば「楽只堂年録」所収の三河吉田藩牧野大学から幕府宛の十月二十日の届書をみると、「最前書上候潰家千八百三拾六軒と合、三千八百拾五軒 潰家」と記し、先に幕府に報告した潰家数1,836軒を3,815軒に修正している。

三河吉田藩と同様に大坂の被害数の新しい状況が町奉行衆や幕府へ報告されたと思うが、現在残存する史料ではそのことが確認できない。最終的に確定された宝永地震による被害数は史料が存在しないので不明である。よって、宝永地震による大坂三郷の被害は、竈数3,537、軒数653軒、圧死者5,351人、溺死者16,371人以上とするのが正確である(矢田, 2013b)。

4. おわりに

以上、南海トラフ周辺で起った1707年の宝永地震による浜名湖北部の地形変化と大坂三郷の被害数について検討した。本稿で明らかにしたことは、次の3点である。

- ①浜名湖北部地域気賀伊目村の約80パーセントの田地在1707年の宝永地震によって沈降した。

- ②沈降した気賀伊目村地域は、宝永地震から50年後の1756年になっても高潮の際には浜名湖の水面下になるなど、地震前の地形に戻っていない。
- ③宝永地震による大坂三郷の被害数は、竈数3,537、軒数653軒、圧死者5,351人、溺死者16,371人以上であった。

文 献

- 藤原 治・小野英介・矢田俊文・海津正倫・岡村行信・佐竹健治・佐藤善輝・澤井祐紀・Than Tin Aung (2009) 歴史と地層記録から確認された1707年宝永地震による遠州灘沿岸の隆起. 月刊地球, 31, 203-210.
- 西山昭仁・小松原琢 (2009) 宝永地震(1707)における大坂での地震被害とその地理的要因. 京都歴史災害研究, no. 10, 13-25.

- 大阪歴史博物館 (2013) 特別展 天下の城下町 大坂と江戸. 大阪歴史博物館, 1-143.
- 大阪市参事会 (1913) 大阪市史 第一. 大阪市参事会, 479-493.
- 矢田俊文 (2005) 既刊地震史料集の校訂の諸問題. 月刊地球, 27, 825-829.
- 矢田俊文 (2010) 地震と中世の流通. 高志書院, 東京, 1-227.
- 矢田俊文 (2012) 中世後期の地震と年代記. 東北中世史研究会会報, no. 22, 1-8.
- 矢田俊文 (2013a) 一七〇七年宝永地震と浜名湖北部地域の沈降. 資料学研究, no. 10, 1-14.
- 矢田俊文 (2013b) 1707年宝永地震と大坂の被害数. 災害・復興と資料, no. 2, 118-122.

YATA Toshifumi (2013) The 1707 Hōei Earthquake: coseismic subsidence in the northern area of Lake Hamana and damages in three districts of Osaka City.

(受付:2013年5月24日)